

## V. ヴァイゲルにおける神秘思想

—— 終末論に関して ——

名 木 田 薫

岡山理科大学教養部

(1992年9月30日 受理)

### (一)

キリスト教では神の子が世界の中へ受肉するほどにこの世界が重視される以上、この世界が将来どのようなようになるのかを無視はできない。パウロの例をみても、例えば終末の表象でも後の世代からみるといわば神話的であったとされることは止むをえない。こういう現代の状況の中でこそ却って逆に宗教的表象は主体的妥当性を有するものとして成立しうるのではあるまいか。なぜなら理性、信仰的理性は一切のものに対して開かれている、受容的であるからである。従って特定の時代、場所に限定される妥当性しかもたぬ如き表象を思い描くことはできないのである。現代では理性は益々自己批判的である他はない。現代人は一定の固定的内容ではなくて、複数の仮説的な宇宙観しかもちえぬのでなおさらである。

さて、「この世界は時と共に止揚されるであろう。最後の審判の日以後はまた全ての自然的、物質的なものは止揚されるであろう。……(中略)……そこには星も太陽も月も水も空気も若干の要素も存在しつづけはしないであろう<sup>1)</sup>」。こういう告白はヴァイゲル自身が物質的・身体的要素から、従ってまたそういう欲求から自由であることを示す。彼にとっては終末の世界をそういう要素を残して表象することは現在自己がそういう要素から自由でないことを意味したのである。しかしこのことと“霊のからだ”ということとはどう関係するのか。少くとも“からだ”といわれている。肉のからだに対しての霊のそれである。霊のからだに依じて霊の宇宙があってもよいのではないのか。霊は物質と対立はしないと思う。霊と心とからだという場合でも三分法的には考えない(1 Thess 5:23) 如くである。三者は一体である。こういうことの極致として霊のからだを位置づけうる。世界の崩壊後は物質的なものは何もない世界に再びなるという<sup>2)</sup> が、霊と栄光化されたからだはあるが物質的世界は全くないということではよいのか。終末では万物が亡びの縄目から解放されるのであるから、こういうことはいわば過渡期のこととしてはいいうるであろう。しかし彼は、「最後の審判の日以後は、また全ての自然的物質的なものは止揚されるであろう<sup>3)</sup>」という。全きものが現われる時には部分的なものはすたれるであろう(1 Kor 13:10)とあるので、このように考えるのであろう。しかし終末において滅ぼされるのは滅びそのも

のである。今滅びているものが滅ぼされてしまうのではない。滅びているものは滅びないものへと変えられるのである。「最後の敵として滅ぼされるのが、死である」(1 Kor 15:26)。人、動物、植物、無機物に至るまで滅びから救われるのである。しかしそれは、物質的なものとしてただいつまでも存続するというのではない。いわば霊的物質へと変えられることによって、永久運動のように単に持続するのは異次元のものへと変えられるのである。「実に、被造物全体が、今に至るまで、共にうめき共に産みの苦しみを続けている」(Röm 8:22)という。そこで全被造物が滅びの姿をはぎとられて朽ちないものとされる。こういうパウロの告白こそ正に霊を全被造物に及ぼしてゆく愛の立場を表している。滅びの縄目を人ほどには感じないであろう動植物にまでそういう苦しみを感ずるかの如くに感情移入をしているといえる。そうできるほどに彼自身が無になっているのである。無になっているので他のものの立場になりうる。彼は真に無になっているので、もし太陽がいずれは爆発して消滅することを知っていればそういう太陽についても滅びの縄目の下にあると感じて動植物に対してと同様に感情移入の対象にしたかもしれない。無になればなるほどより多くのものに対して感情移入や哀れみの心もちうる。生命を有する、自分と共通のものに対してのみでなくて、生命のないものに対しても同時に哀れみを感じる。全てのものに対し感じる。可能的には一切の被造物に対して哀れみの心、そしてそれを経てとりなしの心を彼はもっているのである。尤も彼が“共に”というときの範囲の被造物のことを考えていたかははっきりしない。しかし少なくとも動植物は入っていたことであろう。太陽や月などの無生物まで入っていたか否かははっきりしない。太陽については当時はいつもあのように輝いていると考えられていたので滅びの縄目の下にあるとは思っていなかったであろう。そこでやはり“共に”と観念されていたのは動植物の如き生命あるものに限られるであろう。日常生活の中で滅びているのを目で見ているものについてであろう。またパウロの“共に”というのはすでに決まっている客観的事実をのべているのではなくて彼のこの一語がそういう事実をつくり出すのである。こういうキリスト者のいわばとりなしともいえる神への気持ある限り神は自然物をも存続させるであろう。我々自身が存在しうるのもキリストによるあがないあつてのことである。人のとりなしによって動植物や自然物まで終末後の世界に存しつづけるであろう。思うに人以外のものについては永存せねばならぬものはないであろう。そういうものについてはより神に近いものとりなしがどれだけあるかにその存続がかかっている。パウロはその告白によってそういうとりなしをしているとあってよい。彼の“共に”という一句によって彼は全被造物を終末後の世界の中へとり入れているのである。「動物は天国にいることはできず、人間のみである<sup>4)</sup>」。しかしこれはパウロのいう“共に”ということと矛盾する。霊の動物として存在してもよいのではないのであろうか。“霊のからだ”という時、そういうからだは人のみにではなくて、他の少なくとも動物についても共通であろうと思われる。パウロの“共に”によって、神は全被造物に霊の姿を着せることによって天国の中へとり入れることであろう。滅ぼさ

れることはないであろう。逆に考えると自分よりもより神に近い存在によってとりなしを受けないものは終末後の世界に存在し続けることはないであろう。キリストによるとりなしなくば人を初めとして全被造物が滅ぼされたであろう。その頂点たる人間が墮落することによって全被造物は同じ滅びの道をたどる他はないのである。あれだけの活動をしたパウロの言葉にはそれだけの重みがあるのである。こういうことはいつまでも続くものは愛であるという考えとも軌を一にしている。被造物の存在は全て霊を有している存在の“言”に依拠しているのである。霊が全てである。最初の創造も神の「光あれ」という言から始まった。パウロの“共に”は人と他の被造物との連帯・一体感をみごとに表明している。

「被造物全体が、今に至るまで、共に」(Röm 8 : 22) から考えると、霊の被造物、霊の自然とでもいうべきものが存しうると考える他ない。従って霊のからだというものもヴァイゲルのいうような精神化された、神化されたからだとは異なりはしないのか。オーラムというヘブル語が世界と永遠とを意味していることから分かるように、神が永遠なのでその神によって造られた世界も永遠なのである。そこで宇宙全体が永遠な形のものへと変えられなくてはいけない。全宇宙が朽ちない姿を着るのである。人が地上において造ってきた文明は全て崩壊するであろう。なぜならこれらは全て人の墮罪から始まったものであるから。死は別として現に存しているものが消滅するのではない。今朽ちていっているもの自体が消えるのではなくて、反対に消えなくなることの意味する。滅びの縄目から解かれるのである。恒久的に存すことができるようになるのである。

イエスも「野の草でさえ」(Mt 6 : 30) という。野の草も神の愛の対象としてあげられている。そこで終末後の世界においても消滅してしまいはしないであろう。但しイエスも無生物に対しては神の愛が向けられているとはどこにも示唆してはいない。空の鳥についても野の草についてと同様思いやりを表明している。今の世と終末の世との根本的相違は死があるかないかである。今の世界、宇宙も神の被造物たる以上全く否定されねばならぬほど悪いはずはない。死が克服されると全宇宙の様相は一変するであろう。死の克服とは人が霊のからだを受けることだし、霊の力をもつことである。そのことによって人は自らの力でこの宇宙の様相を変えることもできよう。霊の力によって山を海へ入れうる(Mt 21 : 21) のと同様動物に霊の動物とでもいうべき姿で生きるよう命ずることもできよう。だから外的な姿形は今の宇宙のままでも差し支えはない。霊の力はそういう物質的世界の形状を思うように変えうるからである。物質は霊に従う。人は霊によって物質的世界を自由に変えられるとしても物質的世界は廣大無辺である。しかし霊はそういう全宇宙を包括してもまだ余りあるほどに廣大である。人の心の中の一点に一滴の霊が宿れば人はその一点を通して全宇宙を掌中に納めてしまう。150億光年という宇宙のはてまで手中に納めてしまう。逃れるものはどこにもない。「世界も、生も、死も、現在のものも、将来のものも、ことごとく、あなたがたのものである」(1 Kor 3 : 22)。その通りである。霊の立場にとっては全宇宙は米粒一つぐらいの大きさしかないものであり、更にいえば全く存在しないも同然で

ある。霊は全てのものを究め、全てを支配し、全てを自由に処理しうる。全てのものの上に立っているからである。

## (二)

人が滅びる者から滅びない者に変えられて人は自己の存在のはかなさの苦しみから解放される。これは神による人への愛の一端と考える。ヴァイゲルは身体は我々のすみかではない<sup>5)</sup> といい、我々の祖国はそういうところにはないとされる。確かに今のこの世界についてはそういえるが、身体や物質一般をそのように否定的ばかりに見てもいけない。「新しい超自然的身体は精神化された、神化された身体以外の何であるのか<sup>6)</sup>」というが、“精神化された”身体となってしまうともはや身体といえなくはないのか。“神化された”となるとそういうことである他はないのか。パウロは神化されるということはいっていない。“空中で主に会い”(1 Thess 4 : 17) との表現はもう少し身体的物質的要素が存在するとの印象をうける。「我々は新しい天的、精神的、超自然的な身体をもたねばならぬ<sup>7)</sup>」という。しかし天的、超自然的たることと精神的たることとは一体である必要はないであろう。霊は精神と身体という異質なものを一に帰する力を有していると考えなくてはいけない。

「彼は内的人間の内へ全く引き入れられているからである。天的に神化されて(vergottet),そして精神化されて<sup>8)</sup>」,「外的人間はもはや永遠に存しないであろうから<sup>9)</sup>」ともいう。パウロは vergottet とはいわない。やはり人としての個としての存在を人は保ちつづけている。からだというものがあってこそ個ということもいいうる。「そういう身体はいかなる外的場所も要素をももはや必要とはしない<sup>10)</sup>」。確かにそうであろう。だが不必要たることとそういう要素が存するか否かとは別問題である。神の造られたものでそれ自体悪いものはないので、存在することこそ神の栄光を示している。「我々の身体は……(中略)……神の中に住まうであろう。神化され、精神化されたものとして、なぜなら全ての自然的、動物の、感覺的なものはもはやそこにはあってはならぬからである。もしそんなことがあればそれは欠陥、欠乏そして長い暇であるであろう<sup>11)</sup>」。これは終末のことをいうのであるが、今すでにこうであるのであろう。終末ではなおさらであろう。自然的なものはあってはならぬとされる。朽ちるものが朽ちぬものへ変えられる時、自然のものは単に自然のものではなくなる。自然か超自然かの二者択一をこえた新次元のものになるのである。今では自然をこえた超自然へと出ないことには神の声をきけぬので反自然的傾向が強くなるのは不可避である。しかし終末ではそういう対立はこえられる。そして新次元のものが出現する。ところで、「最後の審判後には物質的なものやすぎゆくものはもはや存しないであろうから、……(中略)……新しい天国、神が造るであろうところの人間は身体、魂と霊である<sup>12)</sup>」ともいわれている。終末では物質的なものはなくなると一方でいいつつも、他方で人間は身体、魂、霊であるともいう。矛盾はないのか。上述の如く身体について精神化され、神化された身体といっているのです。そういう意味でいっているのであろうと思われる。

「あらゆる自然的手段や自然的維持は脱落せねばならぬ、食べること、眠ること<sup>13)</sup>」。神の国ではこうである。確かにそういうものは不要かもしれぬがあっても悪くはない。「将来の生では、我々は外的な死すべき腹の食物を必要としないであろう。我々は全く天における我々の父なる神のように一切の欠乏や弱さなしに存するために<sup>14)</sup>」。来たるべき世では食物は不要という。あるないということと必要不必要ということとは別のことである。神にとってそもそもこの世界を創造する必要はないことであらう。「いかなる言語もなくなるであらう。……(中略)……人はまた文法、弁証論、天文学、数学、医学、法学を必要としないであろう<sup>15)</sup>」。人が墮罪後に文明として造ったものは全て消えるという。これはその通りであらう。しかしパウロでいわれる終末での世界はヴァイゲルでの来たるべき世とは異なりはしないのか。前者はヴァイゲルでの現世と来世との双方をこえている如きものであろう。真に新しいものであろう。ここに神秘主義というものとは区別されたところの神の側からの新しい創造というものが存しているのである。確かに終末の世界では彼のいう如く言葉は不要であらう。口でいわずとも霊によって互いに分かっているであらう。また言葉があったからとて愛の働く機会がその分増えもしないであらう。「機関も権力もやむであらう。……(中略)……誰も最高の者でも最下位の者でも最初の者でも最後の者でもないであらう。……(中略)……誰も自分固有のものをもたぬであらう。国、人民、畑、草原、家等<sup>16)</sup>」。この世を逆転させた如き印象の終末の世界を感じさせる。この世の世界と来たるべき世界とが一連のものという感さえうける。パウロはおぼろげに見ているという。ここでは反対にいわばはっきり見られている。真に霊的に異質のものは今はまだ見られていないので、パウロはまち望むという (Röm 8 : 25)。ヴァイゲルでは身体的なものを精神的なものに比べて否定的にみてゆくということと呼応してこのようになるのであろう。新次元のものはこういうものとは異質ではないのか。確かにイエスも天国ではめとったり、とついだりはしないという (Lk 20 : 34) ので、現世を逆転させた如き天国描写が一概にいけないとはいえぬ。しかしたとえそうではあってもこういう逆転をもこえたところ、おぼろげに見ているというところに心は本来あるべきである。また、「将来の世界のあの生においては名前によるそういう区別は一切あるまい<sup>17)</sup>」という。個がある限り名はあるであらう。神が人に語りかける時に、「わたしは、有って有る者」 (Exod 3 : 14) と語る。「名前等はただ人間の最も軽い部分、つまり死すべき身体に関わっている<sup>18)</sup>」というが、からだの最も軽い部分とはいえぬ。愛はいつまでもつづくといわれるが、それには多様性が不可欠である。同種のもの間より異種のもの間でこそ愛は働く機会が多い。「彼ら (エリヤとモーゼ) は身体的にイエスに現われたのだから彼らもまた区別のために名において呼ばれねばならなかった<sup>19)</sup>」ともいう。天国でも霊のからだある限り個は存する。そこで名は不可欠である。「自分を他人より貴いとみようとする。かくて家系や貴族が生じた。即ち罪から人が名前や称号を他人に与えることが生じた<sup>20)</sup>」。確かに世俗の名誉としての名は人の墮罪後に生じたといえよう。しかし名前自体は個というもののあり限り不可欠であらう。

ところで、ヴァイゲルでは自分がそうなることによってその対象を認識できるという考え方があり<sup>24)</sup>、そこで“顔と顔を合わせて、見るであろう”(1 Kor 13:12)についても *vergottet* ということが不可欠なのであろう。尤もこういう考えは彼の宗教的体験自体に根ざしたものであって、決して単に人間の理論的考え方を終末理解へ導入しているというが如きことではありえない。たとえそうとしてもパウロのこの語はキリスト信仰からのいわばコロナの如きものであってどこまでもキリスト中心的に解さねばならぬ。その場合には *vergottet* ということには思い至りえないのではないかと思われる。また彼はこの語の実現がどのようにして行なわれるかについてはその時周知してはいなかったであろう。“今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている”(1 Kor 13:12)ということとの対比でいっているのである。今現在いっていることはキリスト信仰から独立したことではないのである。尤も“顔と顔を合わせて、見るであろう”(1 Kor 13:12)という言葉は確かにコロナの如きものとしてもそれはそれとして彼にとっては明確なイメージのものであったと思われる。現代の人間にとっては不明確としても彼にとっては明確であった。不明確ではキリスト信仰として不十分ということになってしまうであろう。

### (三)

さて、Röm 8:22にしろ 1 Thess 4:17にしろそういう終末的描写は結局キリストへの信仰以外のことがいわれているのではないのである。救済史などというものを述べているのではない。虚無の底から出現してきたキリストへの信仰がそういう形で表現されているのである。自己の虚無性が分かれば自らそういうキリストが現われる。両者は同時現成である。そういう無の中に現われたキリストがパウロにそういう告白をさせているのである。しかも自己(キリスト)に向って。パウロが無になっているのでキリストが彼に入ってそして自己(キリスト)に向って彼にいわせているのである。このように考えてみると終末的表象であっても、確かにそれは宇宙的終末或は未来的終末についてのものであるが、決して未来のことに中心がおかれているのではない。現在も未来も含まれている如き時間を超越した次元のことがいわれているのである。またそういうことをいう主体(パウロ)も時間をこえた主体になっているのである。キリストの霊と二即一の霊となっている。パウロはそういう主体なのである。時の中におちている主体にとってはパウロの上述の如き告白はできぬ。時の中の主体は時の中に生き、時の中でのことを告白しうるのみである。時をこえた主体になって初めて時をこえたことを告白できる。これら二つの主体の間にはこえることのできぬ深淵が横たわっている。時をこえた次元に生きている者は時の中にあるにすぎぬことを告白はしない。例えば 1 Thess 4:17は未来形でかかれているが、そういう告白をしている当人にとってはすでに現在になっているのである。Röm 8:22でのことも当人にとってはすでに現在のである、決して単に未来のことではない。当人はすでにそういう世界の中に生きているのである。当人には未来のことが現在になり、現在のこと

はずで過去のことになってしまっているのである。時制がいわば一つづつずれているのである。現在すでに空中にあげられた生を生きているのである。「この世はわたしに対して死に、わたしもこの世に対して死んでしまった」(Gal 6:14)のであるから、パウロの生は決定的にそこにあるのである。

ところで、終末では霊のからだがあるように、霊の宇宙、霊の物質が新たに生まれることであろう。物質一般を否定的に見るのは決して聖書に即しているとはいえない。言葉にしても、「光あれ」(Gen 1:3)といったら光があったように言葉によって世界は造られている。言葉は尊い。宇宙が造られたこと自体決して宇宙や物質一般を否定的に見てはいけないことを示している。ヴァイゲルのように物質と精神とを分けて考え、前者は消滅すると考えてしまえば、パウロのいう如く“おぼろげに見ている”ということではなくなってしまう。精神的世界が実現するということではっきりと輪郭が描かれている。パウロが“おぼろげ”という理由の一つとして次のことが挙げられると思う。即ち“霊のからだ”と云っていることから分かるように、精神的なものとの身体的なものとの総合としての霊のからだというものが実現すると考えているからであろう。そこで今はおぼろげにしか分からないのである。なぜならそういう存在は今はまだどこにも存在してはいないからである。ただイエス・キリストにおいてそういう存在のいくらかを見せられてはいるけれども。だからこそおぼろげなのである。はっきりではないし、反対に全然見せられていないのでもないのである。今日で見ているような物質的世界は部分的なものとして最後の審判の日以後では消えるであろう。しかし霊のからだに対応した霊の物質ともいべきものが生じたら、それは部分的なものではなくて全体的なもの、完全なものといえよう。そういう意味での物質的世界は存しうるであろう。否更には存せねばならぬといってもよいであろう。霊と物質との統一こそ神の創造にふさわしい完全なものといえるからである。霊のからだとか終末とかは今日で見ている世界との連続線上に出現するものではない。異質の別次元の世界が現われるのだ。そこで今の世界の中でしか働かないところの人の理性でもってそういう世界を推測することはできないであろう。

終末についてもどこまでも、信仰そのものがキリスト中心であるように、キリスト中心に考えなくてはいけない。終末というものを人の現在の知によって統一的、完結的に考えようとするのは無理なことである。これはキリスト中心ということにそむくことである。終末についての表象は全てキリスト中心の信仰からのほとぼしりである。決して終末についての統一的な反省というが如きものではないのである。統一的なものは却って信仰的ではない。折にふれてのほとぼしりがその都度発露されているのである。統一的に考えようとするのは人の知性の主体性、自律性がなお生きていることを示しているのである。例えば「空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう」(1 Thess 4:17)とパウロはいうが、そういうことに関連して人の知性は種々の疑問をだくことであろう。空中に我々が上げられた後の地上はどうなるのかという疑問が自ら生ずる。しかしそ

ういう点について彼は何もいっていない。つまり空中にあげられることが現実に生じたら次々におきてくるであろう事態についての疑問について何も述べてはいない。というよりもそういう疑問は彼にとっては生じていなかったのである。なぜならそういう考えは決して人の知性によって考えだされたことではなくて霊に属する知であるので、そういう考えに関わってくる諸々の問題について人の知によって考えようという心は生じてはこないのである。つまり彼が終末について表象していることは現に目で見ている世界との関連において述べられていることではない。目で見ている世界とは独立したところの霊的世界が突発的、部分的にこの可視的世界の中に発現しているのである。現実に見ている世界がどういふものであろうとも、そういうものとは独立的に終末を表象しうると思われる。しかもそういう表象は人の現在の目と心とで見る限り統一的、完結的ではないのである。そこで現に目で見ている世界と終末の表象とは全く矛盾していても差し支えはない。むしろそうでなくては救いにはならぬであろう。現に目で見ている世界と矛盾しないことのみが信じうるのであれば、それはもはや信仰には値しない。この世の方に根があることになってしまう。そこでキリスト信仰からのほとぼりとしての終末の表象の特徴は今人の目で見ている世界との断絶があることである。内容的に今の世界との連続性が欠けているのである。また終末の表象は全体として統一的、整合的には描かれていないのである。これらの要件が欠けていればそれは純粹にキリスト信仰より由来したものではない他の要因が混入していることになるであろう。こういう観点よりみるときには、終末においては自然的手段によるところの通信、言葉のようなものはいらぬとか或は広がりというものがあるであろうとかのヴァイゲルの表現をみていると、そういう終末の世界について人の知で整合的、統一的に考えられているのではないかと感じられる。だとすればこれは純粹にキリスト信仰的ではなくて、異質の要素が入ってきているのではないかと思われる。これに対してパウロの表象の根幹にあるものはキリストが受肉して我々を救い給うたのだから再臨では究極的に救い給い、霊のからだともいうべきものを給わらうであろうという信仰である。従ってまた宇宙や人以外の他の生物のことをそれ自体としてその救いを問題にしてはいないのである。どこまでも人中心である。Röm 8：22や1 Thess 4：17におけるそのような告白の根底にはキリストへの信仰、キリストの復活への信仰があるのであって、それ以外のものが何もあるのではない。キリストへの信仰がそういう形で表現されているのである。内容はキリスト信仰である。キリストがそういういわば衣をつけているのである。キリストからいわば半独立的に救済史の如きことがいわれているのではない。そういう意味ではキリストが救済史を含んでいるのである。キリストが救済史を放出しているのである。このように考えてみると、キリスト信仰を太陽本体とするとパウロがいつている終末の表象などは既述の如くいわばコロナの如きものであろう。かくて個人の信仰の立場に立って言えば、救済史などというものは元来はないのである。キリスト信仰の内の一契機を構成しているにすぎぬものがいわば独立してとりあげられ平板化されてしまったものといえる。



いわば立体的構成をもっているものが人の知によって押しつぶされて平面化されてしまっているものともいえるであろう。救済史などという歴史はあえていえないといってよい。あるのはその都度その都度のキリスト信仰のみである。キリスト信仰のほとぼしりと人の知による平板な終末観とは矛盾、不整合、不統一の関係にあるのは当然のことといえる。そういう矛盾はあってもなくてもよいのではなくて、なくてはいけないのである。また事実あるのである。なぜならないということは人の知によってあえて統一的に考えられていることであって、これはもはや信仰とはいえぬからである。かくて救済史というものは線ではなくて無数の点の集合が線の如く見えているものだともいえよう。個々のキリスト者のキリスト信仰という点があるのみである。つぶさに見ねばならぬ。線というものは決してないのである。線は神の立場に立つとき初めてありうるものであろう。例えば 1 Thess 4 : 17の告白は人の自然的知性による一貫的思考を突破してしまったのである。同時にそういう知性にとっての不可思議ということも突破されてしまっているのである。霊とは自然的知性にとっては不可思議と思われることを次々とコロナの如くに放出できることでもある。

## 〔注〕

1) Valentin Weigel : Sämtliche Schriften herausgegeben von Will-Erich Peuckert und Winfried Zeller 1962

- I. Lieferung s. 76f
- 2) ibid. I. Lieferung s. 48
- 3) ibid. I. Lieferung s. 76f
- 4) ibid. I. Lieferung s. 77
- 5) ibid. I. Lieferung s. 57
- 6) ibid. I. Lieferung s. 76f
- 7) ibid. I. Lieferung s. 76f
- 8) ibid. I. Lieferung s. 85f
- 9) ibid. I. Lieferung s. 85f
- 10) ibid. I. Lieferung s. 76f

F. Lieb : Valentin Weigels Kommentar zur Schöpfungsgeschichte und das Schrifttum seines Schülers Benedikt Biedermann 1962 s. 116

Liebによると、信者達は地上的身体とならんとすでに此岸の生命においても一つの身体をうけるとともにこれをもって彼らは最後の審判後につづくよみがえりを通して地上的な身体を脱いで時空のない永遠の中に入るであろうとヴァイゲルの復活についての考えが評されている。

- 11) Valentin Weigel : ibid. I. Lieferung s. 79f
- 12) ibid. III. Lieferung s. 105
- 13) ibid. I. Lieferung s. 79
- 14) ibid. VII. Lieferung s. 398
- 15) ibid. I. Lieferung s. 80f
- 16) ibid. I. Lieferung s. 84
- 17) ibid. I. Lieferung s. 87
- 18) ibid. I. Lieferung s. 87

19) *ibid.* I. Lieferung s. 88

20) *ibid.* I. Lieferung s. 88

21) 九鬼周造『西洋近世哲学史稿』上巻 1967 32-34頁

## Das mystische Denken bei Valentin Weigel —— betreffs der Eschatologie ——

Kaoru NAGITA

*Faculty of Liberal Arts and Science,*

*Okayama University of Science*

*Ridai-cho 1-1, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1992)

Da Christus in dieser Welt geboren wurde, hat sie ihr entsprechende Gewicht. Heute kann man eine fixe Kosmologie haben nicht. Der Kosmos, der Werden und Aussterben wiederholt, kann der vollendete Zustand beurteilt werden nicht. Beim Weltende wird der Tod zugrunde gerichtet und die Dinge, die nun in dieser Welt zunichte werden, werden vom Tod erlöst. Die menschliche Zivilisation, die vom Sünde Adams angefangen hat, wird zusammenbrechen. Das eschatologische Denken nimmt seinen Anfang im Christusglauben. Daher gibt es ein Widerspruch zwischen der gegenwärtigen Welt und der kommenden. So vom Weltende können wir mit unserm gegenwärtigen Intellekt einheitlich denken nicht.